

N29
/
101513

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



2002年1月号



0-0301-003721-0

『個と集団が育ち合う園生活』 (全5巻)

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)

最新刊

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』



判型 B5判 各224~248ページ
定価：本体各1,900円+税

●本書の構成と特徴

- ①生活する姿から
その月にあった子どもの生活する姿から様々なエピソードを提示。
- ②生活の見通しと保育者の願い
その月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを〈読み取り〉〈願い〉〈援助〉の視点で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
個と集団の育ち合いを生み出す実践事例と結びつけたその月の指導計画を示した。
- ④保育のアイデア
育ち合いを生み出すために知っていること、配慮することを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践記録に対して、編者がどう読み取ったか、個と集団の育ち合いを生み出すためのポイントについてコメントした。

個と集団の育ち合いを生み出すための指導計画を求めている保育者のみなさんに贈ります。

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに応えるための参考書です。

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第101卷 第1号



幼児の教育 目次

— 第一〇一卷 第一号 —

© 2002
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

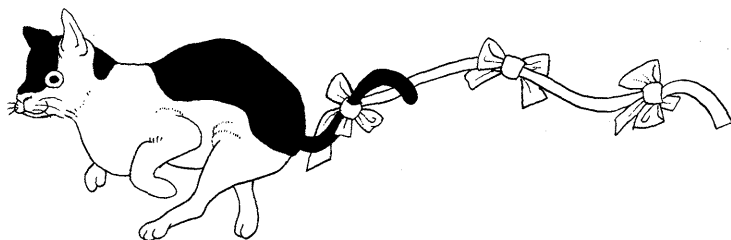
「守られるべきもの」「失われるべくもないもの」は何か……………本田 和子…(6)

育てられている時代に育てることを学ぶ(4)

高等学校における保育授業実践―市民としての親性の教育―

……………金田 利子・大道 明里…(11)

保育の「ほりおこし」から見えるもの―その二―……………生沼 晴美…(22)



モンテッソーリ教育思想の誕生(2)

障害児治療教育から方法の基礎をえて……………早田由美子…(30)

耳をすまして 目をこらして(21)……………宮里 暁美…(38)

オメツプ世界大会へチリンに参加して

―チリの子どもをとりまく環境―……………近喰 晴子・富田 久枝…(40)

絵本三昧 (1)絵本の作り手の視点から……………宮地 敏子…(50)

引き出し……………佐藤 寛子…(57)

表紙絵／佐々木麻子

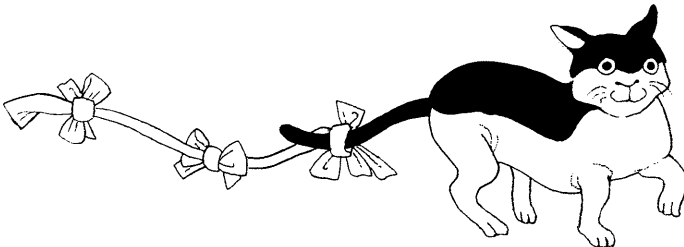
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ドラ猫」

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子





ある日

撮影・平野 清





「守られるべきもの」

「失われるべくもないもの」は何か

本田 和子

*

「聖域なき構造改革」という言葉が巷を駆け抜ける。従来、不可侵の聖域とみなされて改革のメスが入れられなかった、もしくは、入れようともされなかった領域が、「改革」という視野のなかに浮上してきたのである。

周知のように、大学教育もそのターゲットの一つとされて、マスコミ等を賑わしている。当然のことながら、幼稚園保育も例外ではあり得まい。考えて見れば、数年



前から話題とされ、教育要領の改訂をも促した問題、たとえば、少子化対策の一環としての「子育て支援」の保育内への取り込みは、伝統的な幼稚園保育に対する構造改革的提言に他ならなかった。それは、「幼稚園保育の対象は、三歳から就学前の満五歳まで、保育時間はおおよそ四時間を原則とする」という、伝統的幼稚園保育を根底から揺すぶって、新しい社会的要請に応えよと迫ったのだから。

しかし、それらに対して、幼稚園界の対応は鋭敏とは言い難かった。というより、それらを「幼稚園経営面の少子化対策」、すなわち、少子化によって園児数が減少し、経営困難に陥った幼稚園の救済策程度に見て、むしろ、「幼稚園保育の邪道」と忌避する傾向すらなかったとは言えまい。結果として、それら要請からの「防衛」をこそ良識とし、「幼稚園保育の王道」を守るために、延長保育や預かり保育に手を染めるくらいなら、というより「手を汚す」くらいなら、わが幼稚園は閉鎖しても悔いなどという勇ましい意見すら耳にすることも稀ではなかった。自分の園は志望者も多く父母の要望もない。したがって、子育て支援などという世の潮流に流されず、ひたすら「よい保育」のみを追求したいなどという超然とした見解が、半ば公然と口にされたのもこの動きと無縁ではないだろう。

このとき、わが国の「幼稚園」は、というよりそれは学校教育全般の問題かも知れ



ないのだが、固定観念と固定理論に支配された少なからず硬直化した制度であり、そのゆえに時代や社会の動きから隔絶されて、閉じられた囲いのなかにあることを自ら証明してしまったのではなかったか。なぜなら「よい保育」の名の下に、それまでの体制下で「良し」とされた制度・組織・内容を守ることのみ熱心であって、新しい要請に対して、それが何を意味し、求められているものが何であるかを考えようともしなかったのだから。

*

現在の菌止めのかからない「少子化傾向」と、それに伴う将来的な人口減をどう考えるかという問題は、私たちにとってより真剣な論議の対象とされるべき問題であろう。単に、「少子化阻止」の政策だけが先行して、その対策にのみ性急である現状には肯定し難いものがあることも確かである。わが国の今後の経済政策や産業動向を見通し、長期的な展望を明確化した上で、未来人口を予測することが必要であろうし、それに基づいて、現行の「少子化対策」に異を唱えることがあってもよい。たとえば、未来のわが国は、出生率低下および人口減少という現状を引き受け、少数人口社会として活路を見いだすべきだとする見解もそれなりに妥当性を持つだろうからであ



る。ただし、その際には、どのような社会が構想され、そのなかで、私たちは、どのような暮らしを営んでいくことが出来るのかという、将来設計が必要とされるであろう。その場合には、国際レベルでの産業競争に、大量の人的資源を投入することで、何とかそのレースに勝利してきた従来の国策と、それを前提とした国民生活は、根底から問い直されざるを得ないからである。

前記のように、行政当局の「少子化対策」に対する根拠のある異議申し立ての上で、幼稚園への諸種の要請にも異を唱え、あえて時流無視を表明するとしたら、それはそれなりに信念ある行為として肯定されてもよい。しかし、単に、従来の保育観やこれまで踏襲されてきた保育慣習と異なるからという理由で、それから目を背けそれを退けるとしたら、幼稚園は「いまを生きる親子と、これからを生きる子ども」のための施設ではあり得ないのではないか。私たちは、いま、保育施設が、それぞれの時代に生み出され、「それぞれの時代の子どもと親」を支える施設であったことを想起すべきであろう。その営みが、仮に「教育」に比重のかけられたものであるにせよ、あるいは「福祉」を主眼としたものであったにしても、いずれも、「子どもと親」を支えるという目的は同じである。もし、現行の制度・組織・内容、とりわけ「教育と福祉の分離・峻別」が、これからの子どもと親にとって相応しくないものに変わりつ



つあるとすれば、それは、当然のことながら「改革の対象」とされてしかるべきと思われる。

ただし、この際に怠るべくもないのは、改革されねばならない制度・組織・内容に対して、「守るべきもの」、というより「失われるべくもないもの」を確認するという行為である。それは、言うまでもなく、「いと小さき者の声」に耳を傾けること、そして、「すべての」子どもと親にとって、彼らがよりよく生き成長するための援助を怠らず、その必要を満たすということ以外にはないのか。

ここで「すべての」のいう冠詞を強調するのは、幼稚園保育の場合、時として「子ども」という対象が「わが園児」に限られ、いま、幼稚園に入っていない、あるいは入園を許されていない、様々な子どもたちが視界から除外されることが少なくないからである。「よい保育を守る」ことが主張され、「保育の本質」が云々される場合、それは、「すべての子ども」を視野に入れたものであるべきではないか。「入れない子どもにも香れや 梅の花」という倉橋惣三の一句が、改めて想起される昨今である。

(お茶の水女子大学)

育てられている時代に育てることを学ぶ(4)

高等学校における保育授業実践

―市民として親性の教育―

金田 利子

大道 明里

はじめに

先回までは、二回中学校の実践を続けてとりあげました。その一つは「育っている時代に育つことを学ぶ」として、発達教育についての実践であり、次

にはジェンダーの視点から、保育を学ぶことがジェンダーバイヤスになりかねないことに視点をおき、育てることと、働くことをともに求めていく男女青年への保育教育の実践でした。

今回は、高等学校における保育教育の実践を取り

あげます。高校生は、育てられてきた自分とやがて育てる側に立つかもしれない自分との接点にいるため、中学生の時期よりは自分とはどんな親になろうかという思いも少しは出てくる時期になります。しかし、ここで考えておきたい大切なことは、保育教育は決して親になるための準備教育を意味するものではないということです。

親になるかならないかは、個人の意思決定によることが生むものに保障されている権利（リプロダクティブライツ）です。大切なのは、親になってもならなくても、すべての大人すなわち親世代に育ってほしいのは「親性」の資質なのだと思います。「親性」とも、「育児性」とも、「養護性」とも言われているが、幼い者を愛しみつつ、守り育てようとする資質、のこを意味します。この力は、異世代と発展的にかかわる力であるが、その根源は技術的な力以前に不可欠な、他者の立場に立つて共感できる

「共感性」ではないかと思われれます。この力を育てる「共感性の教育」こそ、家庭科の保育教育の根源であるのではないのでしょうか。

今日、「児童虐待」が深刻化してきています。また、幼いころ虐待を受けて育った親はまたわが子を虐待するという「虐待の連鎖」が問題にされてきています。それならば、どこかでその連鎖を断ち切らなければなりません。この連鎖を断ち切る上で、大きな力になりうるのが家庭科の保育教育であると考えられます。

とりわけ親世代になることを多少とも意識し始めた高校生の保育教育にはこの点についての期待が持てるのではないのでしょうか。

そこで、今回は高等学校で、やがて親世代になる「すべての高校生に市民としての親性の教育を」と意識的に実践してきている、大道明里さんに登場してもらいました。

以下は大道さんの報告です。

高校生とはどのような時期なのか

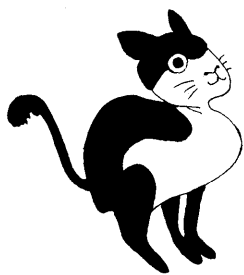
私は高等学校の教師になって九年目、現在、静岡県長泉高等学校に赴任して二年目になります。静岡県東部の普通科高校です。男女比は六対四くらいで男子の方が多く、四年制大学の進学率は四十五パーセントほどの規模校です。素朴で人なつっこい生徒が多く、比較的のんびりした学校生活を送っています。

高校生の体の発達は乳幼児ほど明らかではないのですが、心の変化は劇的です。中学を卒業したての一年生は、まだまだ幼さが残り、自分たちが親になるということを考えたことは少ないようです。

しかし一年の冬休み前に「保育」を学習し、町内にある保育所及び幼稚園のご協力を得て「保育体験実習」を一日行なってみると、意識が大きく変わる

ようです。保育実習後の生徒の感想には子どものかわいらしさや、純粹さへの驚きを書いたり、子どものお手本になるためにがんばった様子を書いてあったりして、もうすぐ自分も大人になる段階に来ているのだということを実感する生徒が増えます。

わずか一日ですが、実際に子どもとふれあうことで親性が芽生えていく、乳幼児が高校生を成長させるというまさに生きた教育が繰り広げられます。私自身も、普段の生活では見られないような生徒の優しさや気配りなどが見られて驚きます。幼児に「お兄ちゃんはどうして靴を踏んではいけないの」と聞かれてはそのままいるわけにはいきません。見本になれるように行動していただきました。県内の高校全てでこの保育実習が行



われているのですが、本校のように丸一日かけるところはあまりないようです。朝から夕方帰るまでずっと乳幼児の生活を見ることが出来る経験は、本当に貴重です。高校生が保育を学ぶことは高校生自身の発達を促すのだという感じますし、決して高校生に保育が早すぎるということはないのだと思います。

三年生になると、高校卒業をひかえて生活的自立を迫られたり、経済的現実を考えざるを得なくなったりして、親への感謝や尊敬の気持ちが自然と出てきます。しかしこのような成長を迎えるまでは、自立に向けて誰もが悩み苦しんでいます。思春期の自分が今どのような変化をしているのが客観的に分からず、とにかく苦しいのです。保育を学ぶことは、そのような思春期の生徒にとって自立を助ける一つのきっかけになると思います。つまり、自分の

成長発達段階を客観的に学び、これから向かう大人への意識を持つことで、ゆとりができ、壁を乗り越えられるのではないかと思います。高校時代は大人になる最後のものがきの時代です。私たち大人は、彼らをまもなく自分たちの仲間入りをする後輩のように迎えてはどうでしょうか。

高等学校では「保育」で何を学ぶのか

現在、本校では一、二年生に「家庭一般」という家庭科全般を学ぶ科目を、三年生の選択者に「保育」を教えています。「家庭一般」の中に「保育領域」がありますが、その他に食・衣・住生活・家庭経済・家族などあり、「保育領域」を学ぶ時間は十五時間程度というのが現状です。

「家庭一般」保育領域の内容は、青年期の生き方・生命の誕生・乳幼児の発達・子どもの成長と保育と

いう四つの内容です。また、選択「保育」では、思春期の健康と生命誕生・親の養育行動と家族・乳幼児の発育の特徴・乳幼児の発達と精神保健・乳幼児の生活・乳幼児の健康・子どもの文化と遊び・乳幼児の福祉についてより詳しく学習します。

いずれの項目においても最初に「育てられている」ことを自覚します。それを踏まえて「育てる」立場になろうとしていることを意識するという段階的な進め方になっています。子どもを扱う前に自分を振り返ることが、親性を育む重要な点です。次は「育てられている自分」「思春期の自分」を自覚する授業と、「育てる自分」を意識する授業について簡単に紹介したいと思います。

「育てられている自分」と「育てる自分」の授業

「育てられている自分」について学ぶ授業として、

『私の子どもの頃』というプリントを作りました。

- 1 出生時の身長、体重、安産か難産か
- 2 出身保育園・幼稚園、よくした遊びは何か
- 3 小学校就学前までに泣いた思い出は何か
- 4 名前の由来

以上の内容を生徒に書かせます。その後何人かの生徒に発表してもらいながら、生まれたときから現在に至るまでを友だちと自分を重ねて振り返ります。この四つの点を取り上げた理由というのは、出生時の身長、体重、安産か難産などを聞き、乳児の体の発達や生命の誕生について学ぶ動機付けにしたいからです。また二つ目の出身保育園や幼稚園については子どもの成長と保育というところで集団保育や子どもの遊びについて学ぶからです。さらに泣いた思い出というのは子どもの心の発達や人間関係などについて触れることにつながりますし、最後の

名前の由来については、自分の誕生を祝福してくれた親の気持ちを理解したり、生命の尊さについて考えたりしてほしいということでこの四つを選びました。

1. 出生時の身長、体重、安産・難産について

「こう見えても赤ちゃんの時は小さくて保育器に入っていました」(男子)

「ミルクを飲まないで母が心配していました」

(女子)

「双子で帝王切開だったそうです」(女子)

「吸引分娩したので頭がビヨーンと伸びてしまいみんな心配しました」(男子)

2. 出身保育園・幼稚園とよくした遊びについて

「○○幼稚園の月組でした」(男子)

「三歳まで○○保

育園で、その後○

○幼稚園にうつり

ました」(女子)

「泥遊びやおに

ごっこをしまし

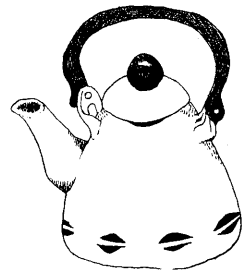
た」(女子)

「竹馬や鉄棒が好きでした」(男子)

3. 泣いた思い出について

「弟と遊んでいて、テーブルにおいてあった食器乾燥機を下に落として、中に入っていた食器が全部割れたときです」(女子)

「近所の一つ上の男の子の腕を噛んで、その子が泣いたから、お母さんにすごい怒られて泣いた」(男子)



「下水の蓋みたいな所の上を歩いていて、足が溝にはまってこけて、前歯を二本とも折ったこと」（女子）

4. 名前の由来について

「やさしい子に育ってほしいという意味で優という字を使ったそうです」（女子）

「低体重児だったから健をつけて元気にそだってほしい」（男子）

「亜由美は左右対称で裏表がないからそんな子になっってほしい」（女子）

生徒一人に一つずつの思い出がありました。生徒の子どもの頃を聞いていくと、やはり恥ずかしそうな様子でしたが、自分と似たような体験を聞いて思い出したり、懐かしそうにうなずいたりして、和やかな雰囲気でした。名前の由来について聞くこと

は、親や周囲の願いや自分の誕生を喜ぶ親の姿に思いを寄せることにつながっていったようです。自分が生まれこうして育っていることを、簡単な質問に答えることで感じられたらと思います。そして「育てられている」という感覚が自然とわいてきたようです。

親へ手紙を書く実践

もう一つ「育てられている自分」を自覚させようとした授業を紹介します。それは自分の親に短い手紙を書くのですが、内容は全く問いません。一言何か書いて、その手紙から思春期の自分がどの程度大人に近づいているのかを知ろうというものです。いくつか紹介します。

A「お母さんへ おかげさまでもうすぐ十八歳にな

ります。まだおばあちゃんになりたくないけど運命には逆らいません。大人になってもあなたの子どもです。これからお世話になります」(女子)

B「母に あたしが家を出たら、そのうち母一人になるんだよね。口では何も言わないけどホントはイヤだよ。気付いてほしいな」(女子)

C「お母さんへ あんまりいろいろ聞かないでください」(女子)

A、B、Cの生徒は、まだ親の保護の下で内心では甘えたい気持ちを持っていたり、親を時には疎ましく思っていたりと思春期の自立にもがいている姿が見られます。

D「お父さん お母さん いつもありがとう。仕事がんばってください」(男子)

E「おかあさんへ いつも、仕事、家事と大変ですね。あたしが何も手伝わないからさらにイライラしてるんだね。私が専門学校に行くから、たくさんお金も必要だし、苦労かけちゃうね。お父さんがしっかりしてないから……。あと一年したら東京へ行ってしまうけど、あまり迷惑かけず、自分の力で生活していくよ」(女子)

F「お母さんへ 生んでくれてありがとう」(女子)

D、E、Fの生徒は、卒業をひかえいよいよ生活の自立を意識する中、毎日自分のために働いてくれている親に対しての感謝の言葉や、ねぎらいの言葉もありました。着実に「育てられてる」存在から「育てる」存在にうつりつつあるようです。自分も大人に近づいてきているので、親への思いやりや尊

敬の段階にきているといえます。

これは三年生の選択「保育」の授業です。授業を終えて生徒の手紙を読みながら、同じ年齢でもこんなにも親に対する思いが違うのかと驚いてしまいました。それぞれの「手紙」は授業で紹介し、解説を加えながら思春期のどのあたりにいるのかを考えます。

「育てる自分」への意識

次に、「育てる自分」を意識する授業についてです。先ほど保育の内容を紹介しました。その中で生徒が特に興味を示すのが「親の養育行動」というところです。児童虐待や育児ノイローゼ、あるいは早期教育などに関心があるようです。子どもにとっての理想の大人、理想の親を高校生なりに考えていたり、逆に問題のある家庭や親の行動には厳しい目で

批判したりします。

ここではグループに分かれて「ものがたり」を作る活動をしました。テーマを決め、子どもを登場人物に必ず入れ、最後には問題が解決されていくという条件です。生徒の考えたテーマは、小学校お受験、夫婦の不仲、忙しすぎる両親などでした。

会話形式で進められるものがたりは、最後に役割を分担して発表しましたが、生徒はいきいきと取り組みました。内容が多少稚拙なところもありましたが、思いの他楽しかったようです。子どもを登場させるのは、子どもの立場に立って問題を考えてはしなかったからです。子どもにとってどのような夫婦、家庭が望ましいだろうかと考えるきっかけになったと思います。授業後の生徒の感想では「夫婦の仲の良し悪しが子どもの心に影響していることが分かった」「親になるといっなのは子どもを生むだけでなく

てどのように育てていくのかを考えなくてはならないと思う」「子どもの立場に立って行動しなくてはならないと思った」などがありました。おおむね成
功だったと思います。

以上、大変些末な授業内容ですが、生徒の親性を育てるといふ視点で実践してみました。授業をしな
がら高校生が変わっていく様子がとてもよくわかります。「将来子どもがほしくなった」「子どもが嫌いだ
ったけどなぜ子どもが泣いたりわがままだったりするのかわかるとか、その仕組みがわかった」などの未来への声
もありました。また今の家族への接し方を振り返り、「親の大変さが分かり、もう少し家の手伝いを
したい」とか、「幼いきょうだいにやさしくしたい」などと今日家に帰ってからの自分の行動にもつな
がった生徒もいました。高校生にとつての保育がいかに重要なのかを、より多くの人に理解していただ

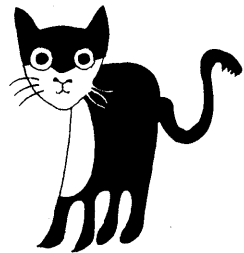
けるよう実践を続け
ていきたいと思いま
す。

まとめにかえて

よくある質問に、

家庭科の教員だから食物が被服が専門ですか、とい
うのがあります。生徒からはもちろん、職場の方で
もありますが、いいえ「保育」の研究室でしたとい
うと、そういうのもあったのかという反応が一番多
いのです。確かに幼稚園教諭の免許も、保育士免許
も持っていないのに「保育」が専門だというのは理
解しがたいことかもしれません。でもそのようなと
きは、宣伝のチャンスだと思つて簡単に説明させて
もらっています。

私の専門は中・高校生に、親になつてもならなく



ても、「子どもを育てられる力」すなわち「親性」を、育てることであると。男女が出会ってお互いに思いやっっていくことの大切さや、自分と相手の人生をいきいきとさせることの重要性を若いうちに学んでいってほしい。家庭を持つ前の最後の学習チャンスに、生命の尊さを伝えていきたい。衣食住が豊かになっている中、人間そのものの豊かさが遅れてしまっているように感じます。単に子どもの育て方を教えるだけではない保育、自分も育つ保育を目指していこうと思います。(以上、大道)

おわりに

九月の初旬にカナダで「共感の根っこ」(Roots of empathy)のプログラムを発展させているメアリー・ゴードンさんが日本に見えました。「赤ちゃんが教室にやってくる」というキャッチフレーズか

らもわかるように、赤ちゃんの教育力を活用し、年に九回月一回の出会いに赤ちゃんの発達の事実を学び、連れてきてくれる親と赤ちゃんの関係から親子関係を学びます。また、言葉で表現できない赤ちゃんの気持ちをわかって学びます。この取り組みもまさに、「親性」の教育です。

男性も女性、乳幼児期から高齢者まで、こうした共感の教育・親性(養護性)の教育は大切です。そしてこの視点に立って社会が営まれるなら、虐待だけでなく、国と国との間の戦いも回避できる道につながるのではないかと思います。

金田(静岡大学)

大道(静岡県立長泉高等学校)

保育の「ほらおっけー」から見えるもの

— その二 —

生沼 晴美

昨年度末、私はある研究会で、三年前のビデオ記録を観ながら、保育者の援助の方法や子どもの育ちについて、考え合う機会を得た。そのビデオは、自園での園内研修が始められた年（九十七年度）に私ともう一人の保育者として担任していた三歳児の様子、主に木馬をめぐる男児たちのやり取りや、その周辺で気になる子どもにかかわる私の姿を記録したものである。私にとって、その消し去ることの出来

ないビデオ記録は、当時の園内研修で私が抱えていた保育の課題をそのまま映し出すものであり、出来ることならば、もう二度と観たくないと思うものだった。もう触れて欲しくない、隠したいと思うような自分の姿を再びさらけ出すことは、苦痛でしかないと思っていた。

しかし、三年ぶりに映し出される子どもたちの遊びの様子と自分の姿は懐かしく、また新鮮な発見を

与えてくれるものであった。当時は撮影される当事者として主観的な見方をし、苦痛と感じていた事柄を、三年を経た今は、客観的な見方によって意味深い事柄として受け入れられるようになっていた。

当時と現在とで同じビデオ記録をもとに話し合う機会を得て振り返ってみると、この三年の間に、保育者として、保育を省察する視点や感じ方が変化したとするならば、どのような要因によってそれが起こったのだろうか、また、その変化が保育者の成長につながると言えるのだろうかという問いが起る。ここで、ビデオ記録の概要や当時の園内研修や研究会における記録、当時の日誌などを整理しながら、それを探ってみようと思う。

ビデオの概要

・撮影されたのは、九十七年度三学期（九十八年一月末）。主な登場人物は三歳児のU男、K男、Y

子、Y男とY男にかかわる私。

・当日までの様子を簡単に記すと、U男とK男は、入園当初から同じ仲間です。汽車を使って遊ぶことが多く、レールを組み立て、その両側にコルクの積み木で駅や家を作ったりすることが続いていた。一月に入ると木馬に乗ることが増える。特にK男は、園内に三つしかない木馬を使うために、登園時間を早くしていた。一月二十三日の保育記録にはK男が乗っている木馬をU男が引きたいと言っても、K男がそれを拒否したことからU男がK男を叩き、二人とも泣いたこと、年長児が二人のけんかの仲裁をして、交代で引くことになったが、すぐに止めてしまったこと、またその出来事から、「K男は木馬に執着」と書かれている。Y男は体調を崩して長く休むことが多く、一人でいることが多かった。また、周囲の子どもがしていることに関心があり、かかわろうとするのだが、「○○君はもう△△君と遊んでるから

（入れない）」とつぶやき、積極的に他者にかかわるほうではなかった。

・当日のビデオの流れは、以下のようなものである。

次々に登園して遊び始めている子ども、保育者や友だちと言葉を交わす子どもたちがいる保育室へ、木馬に乗ったK男が登場する。そこに、登園してきたU男「遅くなっちゃって…。(木馬を)取って置いてくれたのか」K男「一番早く来たから。誰もいない時に…」という会話。U男の仕度が済み、二人でホール(遊戯室：年少の保育室とホールは扉を挟んでつながっている)に出かける。ホールでは、K男が木馬を引き、U男がお客になつて待ったり、乗ったりしている。その後登園してきたY男は、絵本を持ってホールの奥にある図書コーナーへ向かうと、そこに止まっていた、U男が引く木馬に乗る。が、すぐに降りてしまう。後からY男のところに行

真っ直ぐに行く私(Y男が木馬に乗ったことは全く知らない)。木馬で遊ぶ二人は、電車やバス、タクシーなどのイメージを言葉や仕草で表しながらホールを何周も周る。途中でY男と私のいる図書コーナーに立ち寄り、運転手の交代をする。二人はホールを出て廊下を通り、年中や年長の保育室を見て歩く。Y子は、朝から木馬を探していたのだが、この頃やっと手に入れて、U男とK男の遊びに参加。木馬が二台になり、二人から三人になったことで、Y子がU男を誘って自分の木馬に乗せたり、運転手のK男が乗車拒否をするなど、U男、K男の関係に変化が表れる。その間、ずっと場所を変えず、図書コーナーで絵本を見るY男と私。U男やK男、Y子はしばしば私たちのところへやって来るが、私はその都度短く言葉を交わして対応している。

この日、私が最も気にしていたのがY男である。

一緒に遊ぶ人を求めていながら、なかなか関係を持つことが出来ず、不安げなY男とともに過ごすことが大切だと思っていたので、とにかくY男の傍に行こうという気持ちだった。U男とK男が木馬で遊んでいるのは分かっていたが、「タクシーごっこで一緒に仲良く遊んでいるな」という単純な見方をし、Y男が満足するまで一緒に過ごそうとしていた。周囲の子どもの遊びの様子も把握しておらず、Y男以外の子どもたちがその時どこにいて、どんなことをして遊んでいたのかなどはほとんど把握していない。それに加えて、私はY男とじっくりかかわっているのだから、他の子どもたちのことは複数担任のA先生が見てくれるのだらうとも思っていた。

当時の園内研修では、木馬をめぐる子どもたちのやり取りの面白さなども話題に上ったのだが、Y男と私のかかわりが話し合いの大きなテーマとなった。他の保育者からは、Y男にかかわるだけでな

く、視野をもっと広げる必要性があることや、Y男にたいしても、違ったかかわり方があるのではないかと、Y男にとって私の存在にどんな意味があるのか、二人だけの閉じられた世界が出来てしまうのか、どうなのだろうか：などという問いかけがあった。しかし、私は、一人でいるY男に、一対一でじっくりとかかわることが、「保育者の援助」だと思っていた。そして、他の保育者の問いかけの意味が理解できず、困惑するだけだった。さらには、私は間違ったことをして、他に正しいことがあるのに、私にはそれが分からないと批判されているのだという思いも抱いていた。とにかく、子どもの成長



や子どもの遊びについての省察をするというよりは、私自身が他の先生からどう見られているか、私の欠点がさらけ出されるのではないのかということばかりが気になり、ビデオの中の自分の姿を追ってばかりいたのではないかと思う。

そのような苦い思い出を蘇らせながら、三年振り
にビデオを観てみる。まず、木馬をめぐるやり取り
の中で、U男やK男が自分の欲求や要求を実現する
ために自己主張をしながら、遊びを継続させるため
にお互いに葛藤し、妥協している様子がけなげで、
会話の豊富さに改めて驚かされた。遊びながら実に
多くの交渉を行い、木馬に乗って動きながら、周囲
の様子もよく把握しているのである。また、私がY
男と長い間絵本を見続ける間に、保育室とホールで
遊んでいる子どもたちの、それぞれの遊びに必要な
援助をしようと動き回っているA先生と、自分との
違いがはっきりと見えてきた。ビデオを繰り返しよ

く観ていると、図書コーナーに行った時、Y男は少
しの間U男の引く木馬にまたがっていたことが分
かった。その発見をするまで、私はこの日のU男た
ちの遊びとY男の接点は全く無いと思っていたのだ
が、子どもたちは私の見ていないところで、多くの
接点を持っているのではないかと思われた。この
ような、ビデオを観る視点が自分から子ども同士、
他の保育者に移ったことにより、私は、当時の園内
研修で問いかけられていたことの意味と、自分の持
つ保育観を理解するようになったのである。

三歳児の生活では、保育者とのかわりによって
一人ひとりが安心して過ごすことが中心で、場を同
じくするといってもそれぞれが自分のやり方で遊び
を充実させることが大切、他者とのつながりはまだ
まだ薄いと思ひ込んでいた私は、気になる子どもに
一対一でかかわることが最大の援助だと思ってい
た。不安を抱えた子どもの傍に寄り添い、実際にと

もにすることが適切な方法だと思ひ、ずっと長い時間、その子が満足するまで一緒に遊ぶべきだと考えていた。それがすべて否定されるものではないと思うが、私の場合は一人の子どもを集団から切り離して二人だけの世界を作り上げていたのではないかと思ふようになった。私自身も、集団を構成する多くの子どもたちがいることを配慮せずに一対一の関係を守ろうとしていたのではないか。そのため、一人の子どもと私の関係は濃くなるが、子ども同士がかかり合いながらお互いがつながり、成長し合う機会を奪っていたのではないか。さらに、出来る限りの、子どもを理解しようとする努力はいたものの、子ども理解をした上での、具体的な援助の方法がかみ合っていないことがはつきりと見えてきたのである。Y男の場合、Y男自身は他者に非常に関心を寄せており、一緒に遊びたいとは思ひながら、積極的にかかわることが出来ずにいたのだけ

ら、私はY男と他の子どもをつなげるパイプ役になるべきであったのに、実際にはY男を集団から孤立させ、ますます関係をつけにくくしていたのだ。

園内研修での問いかけは、このような、子どもとの閉じられた関係を作りがちな私へ保育の姿勢、子どもを観を問うものだったのではないか。保育者自身を評価、批判するものではなく、一人の子どもを成長を助ける保育者集団の仲間として、共に考え合ひ、向上しようとする建設的な話し合いだったのでないか。そう理解すると、共に保育をする仲間への強い信頼感を覚えると同時に、私の持つ保育観が変化していくのを感じた。そして、U男やK男の姿から、三歳児といえども、多くの葛藤を乗り越えながら他者とかかわり、遊びを充実させ、その中で知識を蓄えながらより良い人間関係を築こうとしていることが、私の子ども観を変化させることになったように思う。

このような気づきと変化が生まれたのは、前回も述べたように、園内研修において、その都度立ち表れてくる保育の課題に対しての他者の保育観に触れたり、年長・年中の担任として日々の実践を重ねる中で、子どもとともに保育を作り出していくことの大切さを経験したこと等があげられる。それに加え、この場合は、三年の年月を経たビデオ記録を題材にして話し合うということから、何度も何度も同じ場面を見直し、自分の持つ保育観や子ども観などについて、他者との対話を繰り返したことが大きな要因ではないかと思われる。

また、保育記録を「ほりおこし」て振り返ることによって、入園からの様子、日々の保育の積み重ねの経緯などを踏まえて、長い目で見た子どもの成長の過程としてビデオ記録の一場面を見ることができたことも一つの要因としてあげられよう。ビデオ記録というものは、保育の在りようをその当時のまま

に映し出す。しかし、その当時自分はどうな思いを持って子どもたちを見つめていたのか、どんな援助をしようとしていたのか、というような心の動きは見えづらい。そのため、当時の遊びの見方や感じ方などを振り返る必要から、保育記録を引っ張り出してみる。当時の園内研修のさなかには、思いをはせる余裕のなかった子どもたちの成長の過程を追ってみると、Y男への私の思いとかかわりや木馬が子どもたちにとってどのような存在だったのか、また、一緒に遊ぶことの多かったU男やK男と、Y男とのかかわりの様子などが浮き彫りにされる。保育記録は、子どもの成長の記録であるとともに、保育者の実践と成長の記録でもあると言える。自分の持つ保育観、子ども観、また具体的にど



んなことを考えて保育行動を起こし、どのように感じたかなどを振り返ってみると、自分自身の変化に気づくことが出来るのではないか。その変化は、良くなった、悪くなったという評価では捉えられない。しかし、様々な視点で保育を見直すために「ほりおこし」ていく価値があるのではないかと思う。

園内研修等を通して、自分の保育観や子ども観が変化する時、時に、それには（心の）痛みが伴うこともあり、自己存在が揺るがされると感じることもあるかもしれない。私自身は、保育というものの全体像が全く分からず、自分の保育実践を深く省察することが出来ない頃に、ビデオ記録によって自分の姿を突きつけられ、その痛みを味わうことになった。しかし、その経験があったからこそ、ゆつくりとした歩みではあるが、少しずつ、日常の保育の中で気づきが与えられ、また新たな日々をよりよく過

ごすための示唆を与えられていると思う。一つの事柄に対して、様々な視点から考察を加えていくことは、保育という全体像を捉える上で、非常に大切なことである。保育者として、子どもの育ちにしろ、保育のあり方にしろ、一つの見方でしか見えなかったものを違った角度から見られるようになるということは、確かに成長の表れであると思う。省察の仕方にも様々なものがあるう。時に立ち止まって自分に問いかけながら、また、他の保育者の問いかけに耳を傾けながら省察を繰り返し、保育者としての成長を考えていきたいと思う。

（青山学院幼稚園）

モンテッソーリ教育思想の誕生(2)

障害児治療教育から方法の基礎をえて

早田 由美子

ローマ大学の医学部を卒業したマリア・モンテッソーリは、約十年後の一九〇七年、「子どもの家」で華々しい教育実践を展開する。それまでの間、彼女は医学、精神医学、生理学、人類学、教育学、女性解放思想や社会主義思想など様々な学問や思想に影響を受け、独自の思想を形成していた。今回は、モンテッソーリが最初に影響を受けたイタール (Jean Marc-

Gaspard Itard, 1774-1838) とセガン (Edouard Seguin, 1812-1880) の障害児治療教育との関連でモンテッソーリの思想と方法の基礎を考えてみたい。

知的障害児治療教育との出会い

十九世紀後半のイタリアではまだ教育制度が十分整っておらず、性別や地域によって教育を受ける機会

はかなり制限されていたが、その中で、女性にも教育の機会が少しずつ開かれようとしていた。このような流れの中で、モンテッソーリは先駆的な役割を果たしていった。女子に中学校への入学がはじめて認められた一八八三年に、彼女は工科中学校に入学し、さらに、工科高等学校にも進んだ。一八九〇年にはローマ大学に入学し、その上、まだ、女性には入学が許されていなかった医学部へ様々な難局を乗り越えて進学し、ローマ大学で最初の女性の医学博士になったのである。それ以前にイタリアで医学を学んだ女性にはエルネステイーナ・パベル（一八七二年 ピサ大学）、アンナ・クリシヨフ（一八八五年 ナポリ大学）、ジューゼッピーナ・カッターニ（一八九〇年ごろ トリ



ノ大学）などほんのわずかな例があるだけである。モンテッソーリは、医学部在学中から婦人科病院、小児病院、神経クリニックなどで助手を務めるなどして臨床的な経験を重ねた。また、精神病院にも通い、治療の対象になる患者を選ぶ仕事も行っていた。当時、西欧諸国では知的障害児のための養護施設が設置されている国もあつたが、イタリアではまだ、障害児は精神病院に入院させられていることが多く、モンテッソーリは病院での知的障害児の様子を知ることになる。ここでは子どもたちが遊び道具もない殺風景な部屋に閉じ込められて一日を過ごしていた。発達を促したり、知的関心を呼び起こすような刺激はほとんど与えられていなかった。子どもたちの状況に触発されたモンテッソーリは障害児に対する関心を深め、研究を進めていった。その中で、イタールやセガンの治療教育に関する思想と実践に出会い大きな影響を受けることになる。

障害児に対する関心を深めたモンテッソーリは、一八九七年にトリノで開かれた全国医学会議や一八九八年刊行の政治評論誌『ローマ』誌上、同年九月トリノでの全国教育会議などで「知的障害者に対する適切な処置」や教育のもつ力の重要性を指摘した。

特に教育会議では「医学と教育学を結び付けていく発想」を提起するとともに、精神医学者ボンフィーク教授による障害児教育関連法の制定案を受けてモンテッソーリはいくつかの具体的な提案を行っている。

公立小学校における障害児学級の開設、専門的教師による障害児の個別教育、重度障害児のための治療教育の特殊学校設置、各地の師範学校における障害児教育の教授、大学に特別課程を設けての治療教育師範学校教師養成などである。

また、モンテッソーリは一八九八年よりローマの特殊教育師範学校の責任者として知的障害児への教育実践と特殊教育の教師養成を行った。その際、イタール

とセガンに関する研究をさらに深め、セガンの『知的障害児の精神治療、衛生法ならびに教育』や『知的障害児—生理学的方法による治療』を訳出し、イタールやセガンの感覚教具を実際に試した。「十年間における私の仕事は、イタールとセガンの四十年間におよぶ研究の集大成である」とモンテッソーリ自身も述べているように、モンテッソーリはイタールとセガン研究に基づいて教育思想と方法の基礎を築いた。

また、モンテッソーリは障害児治療教育研究に基づき、『教育学的人類学』(Antropologia pedagogica, 1910)の中で次のように述べている。「学校や教育学で求められている改革は、社会生活という環境に不適応を示す子どもを含む、発達過程にあるあらゆる子どもへの保護を導くものなのである」。

モンテッソーリはこのように述べて、健全な子どもだけではなく様々な異常や逸脱を示す子どもを含むすべての子どもを視野に入れた教育の改革を提案した。

モンテッソーリは、イタールとセガンの治療教育についての研究と自分自身の障害児との関わりを基に、障害児や社会的不適応を示す子どもを含むあらゆる子どもを対象とした教育をめざすことになる。

イタールやセガンの知的障害児教育

イタールやセガンの仕事は精神病者と知的障害児の歴史の中でどのように位置付くのであろうか。

フーコーの『精神疾患と心理学』（神谷美恵子訳）によると、精神病者や知的障害者の歴史は十七世紀半ばまでの比較的自由的な状態での生活から、十七世紀半ばにおける大収容施設への隔離収容と強制労働の時代、さらには十八世紀末の新たな社会的監視体制強化の時代へと移り変わったとされている。そしてこの最後の動きを進めたのが精神医学の祖として知られるパリのヴェイセートル精神病院首席医師ピネルであった。フーコーは彼を一七九三年に「鎖につながれた人たち

を解放した」が、むしろ「道徳的な鎖」をはりめぐらすことで、「収容施設を一種の恒久的審判所のようなものに」変えたと位置付けている。

このピネルに対して野生児の教育をめぐる異論を唱えたのがイタールであった。フランスの聾哑学校医師であったイタールは、一七九九年にコーヌの森で見つかったいわゆる「アヴェロンの野生児」を対象に教育を試みた。この野生児をめぐる、ピネルとイタールは対立した。ピネルが野生児も知的障害児も「いかなる社会の力も教育をも受け入れない」と主張したのに対して、イタールは野生児を仲間との関係や教育を奪われ、孤独な生活の中で育った子どもと捉え、その教育可能性を見出そうとした。そして、1、社会生活への適応 2、感受性の覚醒 3、概念領域の拡大 4、言語の使用 5、心理的作業を中心とする計画を立てて教育を行った。

しかし、この野生児は純粹の野生児というよりも知

的障害児であつた可能性が強く、イタールも後にその点を意識して計画を立て直し、感覚機能の成長、知的能力の開発、感情の発達に三段階から成る生理学的方法に基づく第二実験を試みた。イタールは、個々の感覚の働きの観念の発展のために強力に作用すると捉え、それを「医学的教育」として応用しようとした。

彼は知的能力の発達には聴覚が最も貢献すると捉え、それだけ孤立させて訓練するために目隠しして音を識別させた。また、触覚を用いて、すなわち、手で触ることで温度差や物の形を弁別させた。さらに金属の文字を視覚的に識別する方法で読み書き教育を行った。

感覚を個別に用いながら、注意、比較、模倣、記憶などの行為によって知力を寛まし、観念の範囲を上げようとした。そして、イタールは、一定の知性を身につけた野生児に「自己的でない感情、もっと包容力のある感情」、「寛容な感情」をも確認した（J・M・G・イタール『アヴェロンの野生児』古武彌正訳）。この

ようなイタールの試みは知的障害児に対して生理学的方法で実際に教育した最初のものであつたと言える。

セガンはイタールから刺激を受け、彼を「哲学的目標と生理学的手段をもつて精神薄弱児の教育をした最初の人」と位置付け評価したが、体系的な欠点という点で批判した。そして、セガン自身は障害児治療教育の体系化をめざした。彼は、一八三九年における知的障害児学校の開設、一八四一年のサルペトリエール院での実践、一八四二年末のピセートル院内の教育などを通して、子どもの障害や能力に合わせた内容と方法を実証的な方法で探し出そうとし、知的障害児の訓練に生理学の原則を体系的に適用する可能性を模索した。そして、モンテッソーリはイタールとセガンの思想と方法を基盤に障害児治療教育を進め多大な成果を上げた。

このように見てくると、フーコーが位置付けた、ピネルまでの施療院での動きとイタールにはじまりセガ

ン、モンテッソーリへと発展する医学的教育あるいは治療教育の流れとでは、決定的に異なることが分かる。すなわち、この三人は教育の対象として認められていなかった知的障害児に教育可能性を見出し、実際に治療教育を試みた点で新しい流れを作った。

また、イタール、セガン、モンテッソーリの試みは、西欧哲学の流れの中でもエポックメイキングなものであった。西欧哲学には感覚と知性を結びつける思想が伝統として存在していたが、医師であったこの三人は、それを理念の域にとどまらせず、知的障害児治療教育の具体的方法として生理学を用い、個々の感覚を個別に訓練する方法を工夫した。彼らは個々の子どもとの反応を確かめながら提示の仕方や働きかけ方を工



夫し感覚を多様で具体的な形で刺激して興味を喚起し、感覚を練磨させながら知力のアップを実際に図ろうとしたのである。

セガンからの発展

では、イタール、セガンの思想や方法を受け継いだモンテッソーリにはどのような独自性があったのであろうか。

まず第一に、知的障害児の問題を医学の分野ではなく教育の分野の問題として捉えた点にある。

モンテッソーリはこれについて『科学的教育学の方法』(II metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini, 1909)で次のように述べている。

「私は同僚とは異なり、知的障害は主に医学上の問題であるというより、むしろ主として教育学上の問題であると直感していた」。

病気の治療において医学と教育学が提携するという
当時わずかだが動き出していた流れの中で、モンテッ

ソーリは知的障害児の問題を医学よりもむしろ教育学
の問題として教育の中で行われるべきであると捉え
た。イタール、セガンはいずれも医師であり、障害児
に教育可能性を見出して治療教育を行ったが、医学か
教育かという区別をそれほど重視せず両者の併存を志
向していた。セガンが晩年の代表作『知的障害児―生
理学的方法による治療』の題名に「教育」ではなく
「治療」という言葉を選んでいることなどをみると、
むしろ医学の領域での治療という傾向が強いことがう
かがわれる。

モンテッソーリも最初は医師として治療教育あるい
は教育的治療 (*didactica clinica*) として捉えていた。

しかし、彼女はそこから発想の転換を行った。すなわ
ち、知的障害児の問題を医学の問題としてよりむしろ
教育学の問題として捉え、生理学という医学的方法を

治療ではなく教育の方法として用いて新しい境地を切
り開くことになったのである。

モンテッソーリの独自性は、第二に、子どもの興味
や関心に合わせてセガン等の教具と方法に少しずつ改
良を加えて自らの教具体系を確立した点にある。

セガンの試みた具体的方法には「筋肉に対する訓
練」、「歩行力と平衡性」「注意力集中」のための作
業、「比較的対照」、「繰り返し」、「手を用いる作業」
（積み木、ボタンはめ、紐結び、はめ込み板、くぎ
板、豆やピンつかみ、玉の糸通しなど）などがあり
（E・セガン『知能障害児の教育』中野善達訳）、そ
れらはモンテッソーリの教具の方法の原型となった
が、彼女はさらに別の要素を加えて工夫した。例え
ば、セガンのはめ込み板は円形、三角形、四角形、多
角形、立方体、円筒、ピラミッド型、円錐、十字型な
どをはめ込む形になっていたが、モンテッソーリは、
その直径や高さや重さに変化をもたせた。

モンテッソーリがイタールやセガンよりも力を入れたのは、読み書きの教育という面である。モンテッソーリは、セガンの研究の中で読み書き教育は、「最も不十分に扱われている」と捉え、独自の方法を模索した。セガンもこの分野に全く関心がなかった訳ではなく、「線を描くのに必要な安定した力と正確さを与えた後、鉛筆を持たせる」ことや、また、「浮き彫りにしたアルファベット」によって、触覚を用いて文字を確認する作業などを考案している（E・セガン『障害児の治療と教育』末川博監修、薬師川虹一訳）。モンテッソーリはそれらの方法を実際に子どもに用いて反応を確認し、それぞれの教具を通して学ぶ内容を簡素かつ明確にするなどの工夫を加えて子どもの興味を



継続的に引き出せるようにして発展させた。

モンテッソーリは知的障害児が教育によって知的能力が向上することを確認し、さらに知的障害児が公立小学校に入学するという成果を上げた。このため、障害児教育の方法を普通児に適用すれば「かれらの人格は驚く程、発達し伸びて行くであろうと徐々に確信」するようになり、ここからモンテッソーリの第三の独自性が生まれることになった。すなわち、生理学的方法を障害児だけではなく、健常児に修正しながら適用した点である。彼女は一九〇七年、ローマのスラム街に開設された「子どもの家」でこれを実践に移し、さらに次のステップへと進むことになった。

（甲子園短期大学）

目をこらして (21)



何をして空振りだった。どうしたらいいか、分からなかった。子どもたちの心が、ささくれだっているように思った。遊びもよく分からず、言葉も行動も荒々しく感じて、子どもたちがかわいいと思えなかった。

初めての産休育休を終え、年少組の途中から担任した学級で、私は戸惑っていた。私が戸惑っていたのと同じように子どもたちも戸惑っていたのだろうけれど、そのことに気付く余裕もなかった。

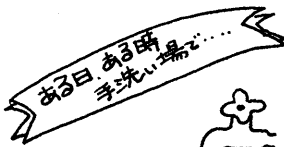
幼稚園が大好きで、子どもが大好きでこの仕事を選んだ。それなのに子どもという時間が苦しい。何もできず何も分からず、もうダメだと思った。

そんなある日、水道の蛇口に風船をつけ水を入れて遊んでいる子どもたちがいた。私はただそこを通り過ぎようとした。その時「きれいだねえ。すごいすごい！」とその子どもたちの遊びを感心して見ている日先生の声が聞こえた。

えっ? と思った。

立ち止まってみつめた。

水が風船の中に入る、ゆっくりり入る。



そして...



・く〜んぐ〜んぐ〜んぐ〜ん
大きくなる。玉!

・じゅ〜んは 風船が
をっけ?... 水を出すと。



耳をすまして

光を受けて、小さいけれど丸くて重い美しい玉ができる。
風船がはずれ水が飛び散る。

水しぶきを受けながら、もう一回！ と風船を蛇口につける子どもたちの無邪気な笑顔を見ていて、突然私の中になつかしさが満ちてきた。その時気付いた。子どもたちの遊びは、私のすぐそばにあったのだということに。

子どもが夢中になっていること、子どもがやりたいと思っていること、子どもが今まきに行っているそのことに目を向け耳を傾け共に喜ぶことを、私はすっかり忘れていたのだと気付いた。

保育が終わって園内研究の講師として来ていてくれたH先生にそのことを話すと「私はただね、子どもたちが面白いことをしているなあと思ったのよ。いい子たちだなあと思って思ったのよ」という言葉が返ってきた。あたたかい先生の一言が、今も私の中に響いている。

新しい年、こうして子どもたちと共に過ごす幸せをかみしめながら、ゆっくり歩いていこう。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)

暑い日に園庭でサッカーをしている子たちに
みみずをまいたら、おどろくよこはれた。



子どもたちと
また
一緒に笑いあえる
ようになつて...

片付けの代わりに、ほみきを
たて、パランスをとって、「あ〜と〜」
と妙にもりあがって... 笑った。

オメツプ世界大会へチリへに参加して

―チリの子どもをとりまく環境―

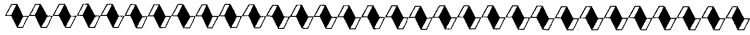
近喰 晴子

富田 久枝

サンチャゴにて

近喰 晴子

三年ごとに開かれるオメツプ世界大会、今年は南米チリに於いて七月三十一日から八月四日の期間開催された。三十七か国九〇〇名がサンチャゴに集い、日本からは二十九名の会員が参加した。今大会の全体テーマは「質の高い教育環境で生活し、育ち、学ぶ子どもの権利」でこのテーマを中心に、研究者や幼児教育実践者が日頃の研究成果を発表した



り、世界の乳幼児保育の情報や動向に耳を傾けた。期間中、午前は講演やパネルディスカッション、午後は研究発表、夜はチャペルコンサートやパーティ等と盛りだくさんの内容が準備されていて、一日の大半をプログラムの元で過ごした。また、開会式に先立ち保育施設の見学も行われ、チリの保育事情を知る手掛かりを得た。

午前中の講演は、いずれも全体テーマに基づいて、質の高い教育環境とはどういう状態か、なぜ必要か、どのよう



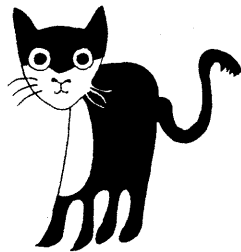
▲参加国の国旗の元、熱心に耳を傾ける参加者

に評価すればよいか等の問題を、それぞれの講演者の立場から問題を投げかけて下さった。なかでも興味深い講演はCCNE事務局長マリエン・ムラネット先生の講演で、生命倫理と教育との関係を脳生理学の観点から示唆に富んだお話を下さった。

会場には展示コーナーも設けられていて、日本や開催国

チリの外いくつかの国と協賛企業が、展示を通して大会に参加していた。チリの展示コーナーには独楽やあやとり、石蹴りなど私達にもなじみ深い遊びが紹介されていて、異なる文化圏で生活しながら、共通の児童文化財を持つことに驚いた。協賛企業の展示品から察すると、このような古典的な遊びのための玩具より、文字や数等に関心を持たせるための知育玩具がもてはやされているように感じた。有力な協賛企業である食品会社は、「我が社の栄養豊富な食品で健康な子どもに」と言わんばかりに、手軽さが売り物のサンプル品を配り、教材関連企業は「我が社の玩具で賢い子どもに」と積極的に自社製品をアピールしていた。多くの国がそうであるように、チリに於いても、まず知的な教育環境を整えることの必要性が強調されているのではないかと思えた。

開催地サンチャゴ市セントロ地区の朝は、おびただしい量の個人バスが出す騒音と、灰



白色に立ちこめたスモッグにより始まる。ホテルの窓から見える町並みはスモッグに覆われ、アンデスの景観も霞んで見える。スモッグの主な原因は、決められた路線をより多く走らせるため、荒っぽい運転を繰り返す個人バスにある。急発進、急停車のたびに黒煙を撒き散らす。しかし、注意して見ると個人バスに混ざって多くの日本車も走っている。燃料や車の性能の問題もあると考えられるが、日本車も美しいこの街の大気汚染に荷担しているのだと思うと心が痛む。

町を歩いていると、街角や広場には物乞いをする母子、無心する子どもの姿をよく見かけられた。経済不況により職を失った近隣の人たちが、比較的豊かなサンチャゴに職を求めてやって来たが、職が得られなかった人たちが多いのだという。しかし、物価の安いこの国の自慢は、食べ物さえ選ばなければ誰も餓死することはないことなのだそうである。

閉会式に出席されたチリ文部大臣の話の中に、「チリはまだまだ発展途上にある国で、貧富の差が大きい。この貧富の差が幼児教育を受ける機会を不平等なものにしている。またその後の学校教育に於いてもその差が歴然と現れている」とあった。そう言えばオメツププログラムで見学したモンテソノーリ幼稚園は、誰もが自由に入園できる施設というより収入も多く恵まれた一部の家庭の子どものもののように感じられた。ヨーロッパから移住した子孫が多く残るチリは、インディオへの差別も根強く残り、これも幼児教育の機会を不

平等なものにしている。

大気汚染とオゾンホールに悩ませられる町、この町で「質の高い教育環境を子どもたちへ」というスローガンにより開かれたオメツプ世界大会、開催地チリの子どもたちにとって、より豊かな教育環境と権利が得られるきっかけとなることを祈念する。

イースター島にて

富田 久枝

スモッグの町サンチャゴを後にし、オメツプのメンバーは幾つかのグループに分かれた。日本に帰ったグループ、サンチャゴに残った人々、アタカマ砂漠のツアーに参加するグループ、そして私を含めた六人がイースター島に向け出発した。ランチリ航空でおよそ六時間の道のりです。時差は一時間。憧れのイースター島に着いたのは夕刻、確か七時頃だったと思う。イースター島に飛ぶ飛行機には、イースター島を経由してタヒチに行く人が七割ぐらい搭乗していて、イースター島に宿泊する客は少なく、到着と同時にやや心細さを覚えた。しかし、日本人スタッフの増田さんが快く迎えてくれ、我々一行は無事にホテルに辿

り着くことができた。ホテルは、沖縄などにあるリゾートホテルを思わせるつくりで、平屋の客室がコの字型に並び、中央の庭にプールがあった。しかし、イースタ島はちょうど雨季（冬から秋）という気候で、リゾート気分という訳にはいかなかった。

翌日は、朝から雨が降り、予定していた島内観光のツアーが中止になってしまった。そこで、イースタ島の中心部を散策することになった。イースタ島は、大きさから言っても、景観から言っても、北海道にある礼文島に良く似た島で、足で散策するにはちょうど良い島である。そして、島には信号は勿論、コンクリートで舗装された道路はない。昔の田



▲インディオの村 口バを引いたお婆さんがあらわれたりして絵のようでした。でも、小さな集落の小学校にはパラボナ・アンテナが設置されサンチャゴ直送の「現代」が運ばれています（アタカマ砂漠のツアー）。



舎道を歩いている。そんな錯覚に陥る風景である。また、植物がほとんど言っていないほど沖繩にそっくりなのである。ホテルでもらった地図と格闘しながら、町の中心部まで散歩し、郵便局で切手を買ったり、市場を覗いたり、すると学校らしい建物が目に止まった。少しでも見学出来ればと思い、なんのアポもなしに、学校で見学を交渉してみたところ、いとも簡単に見学することができ、さらに数日後幼稚園の子どもたちとの時間を作ってくれる約束まで



▲日本企業の援助により復元されたモアイ像

もらったのである。なんとラッキーなことか。

イースタ島での二日目はすばらしい快晴となった。いよいよイースタ島のモアイに会える。胸が高まった。マイクロバスには私たち日本人六人とオーストラリアからのカップルが乗った。イースタ島の景色は荒涼とした大木ひとつ無い丘が続き、海は紺碧、その海岸線は溶岩が流れ出したまま凝固した、ごつごつした浅間山の鬼押し出しのような海岸線が続き、その海岸線にそってモアイは自分の島を見守るように、島の方を向いて立っていた。当時の争いで海岸線に立っているモアイは数えるほどしかなく、殆どが倒され、目をくり抜かれ海辺に転がっている。最近注目された十五体のモアイでさえ、立ち上げられて数年しか経っていない。ほとんどのモアイはまだ当時のままなのである。モアイを切り出した山にも登った。切り出し途中のまま山に埋もれているモアイが点在していた。その光景をみると、人間の飽くなき戦い、そして滅びていった人々の悲しみや苦しみ、そして空しさが伝わってくる。また、イースタ島では、モアイの文化が滅びた後、鳥人伝説の島となる。各部落が年に一度その利権を争うお祭りが行われ、そこで勝利した部落のリーダーが鳥人として一年間すべての権限をもつというものである。その行事がおこなわれた場所にも行った。南極からの冷たい風の吹きすさぶ、断崖でその行事は行われ、どれだけの人々の命が失われたことか。絶海の孤島の自然とともに生きていくには、そのようなシン




ボルや神聖な力が必要だったのかもしれない。

楽しみにしていた幼稚園の訪問の日がやってきた。土産を何も用意していなかったのに、みんなで折鶴を作り持参した。私たちが歓迎するために、子どもたちそして先生方は年に一度のお祭りの衣装（羽根や葦で作った腰みの）をつけポリネシアの民謡に似た音楽に合わせてダンスを披露してくれ、私たちも一緒になって踊った。このダンスの特徴はあやとりをしながら踊ることである。日本の裏側



▲イースター島にただ一つの幼稚園の子どもたち



の、絶海の孤島であやとりである。校庭で遊んでいた小学生はビー玉ぶつけをしていた。なんと不思議なことか。保育内容は知育を目的としたものが多く、チリと同様であった。しかし、驚いたのは殆どの子どもがポケモンを知っていた。日本のアニメがこんなところにまで影響しているとは。

もうひとつ是非紹介したいのは、イースタ島の暮らしである。島に住む動物は争うことも無く、犬、猫、鶏、牛、羊、馬がほとんど柵なしに自由に村を歩いている。人間を含めた動物が共存しているのである。このような光景が残っている地域がどれほどあるのか。文明の発達が生み出すものは何なのであろうか。イースタ島で得たものは、私も自然の一部に過ぎないといった感覚かもしれない。

近喰（和泉短期大学）

富田（東京福祉大学）

絵本三昧

(1) 絵本の作り手の視点から

宮地 敏子

真善美の探求そして希望。この絵本の魅力には
まっぴら長いこと過ごしてきた。まず三回に分け
て、第一回は、絵本の作り手の視点から、第二回
は、絵本の伝え手の視点から、第三回は、絵本の
使い手の視点からとして、おもむくままに絵本の
話をしてみたいと思う。

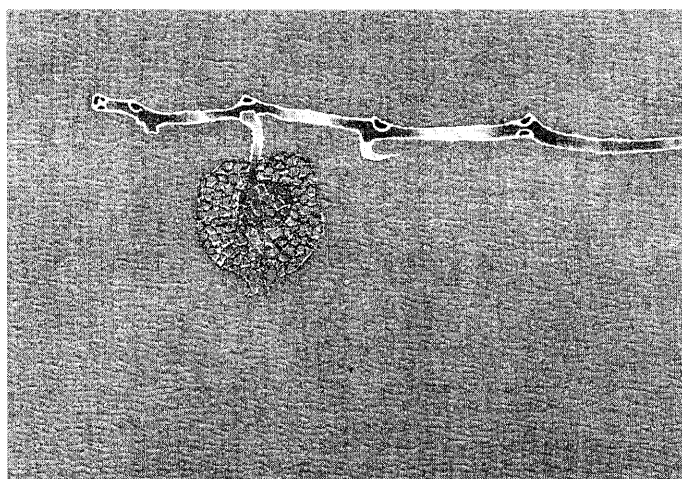
そして最後に、「絵本をあそぶ」と題して、卒

業生の保育実践から子どもたちが絵本を「あそ
んだ報告や保育者養成校の授業で『ぐりとぐら』
(中川李枝子文・山脇百合子絵 福音館書店)を
上演してきたことについて記したい。

さて、絵本を作ったといっても、四冊。詩もど
きの文を私が書き、染色を趣味にしていた母がそ
れに友禅染で絵を付けたものだ。『はなともだ

ち』（水上悦乃染・宮地敏子詩 かど創房）が初
まりだった。限られた人しか見たことのない素人
芸の友禅染の「ぬくもり」を、もっと多くの人特
に子どもにも、美しい日本語とともに伝えられたら
と思った。企画したのは、ちょうど息子二人が
ニューヨークで幼少期を過ごしていたときで、毎
週届く祖母からの絵入りの定期便を孫たちが喜ん
だのがきっかけだった。明治生まれの日本語は、
音読しても美しく響いた。自然の移ろいに敏感
だった人の手紙には、季節の花がスケッチされ色
が付けられていたのだ。

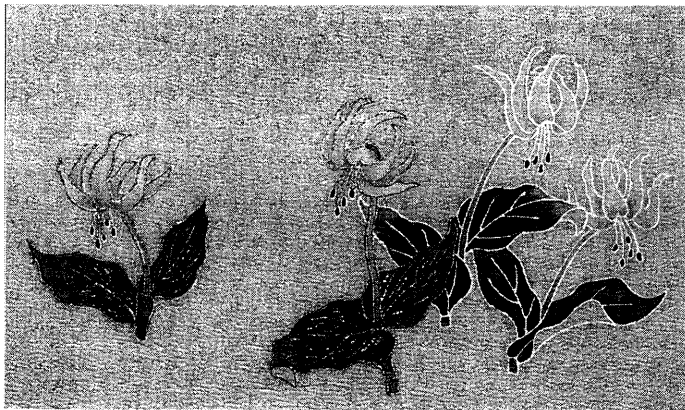
染色を趣味で始めて三十年、花のスケッチは小
筆筒一杯たまっていた。十二の花を決めるのもそ
の中から選べたが、ことはなかなか生まれな
かった。幸い出版を引き受けて下さったのが、教
育の詩人といわれた周郷博先生と親交があった方
で、詩集を多く出しているところだった。彼には



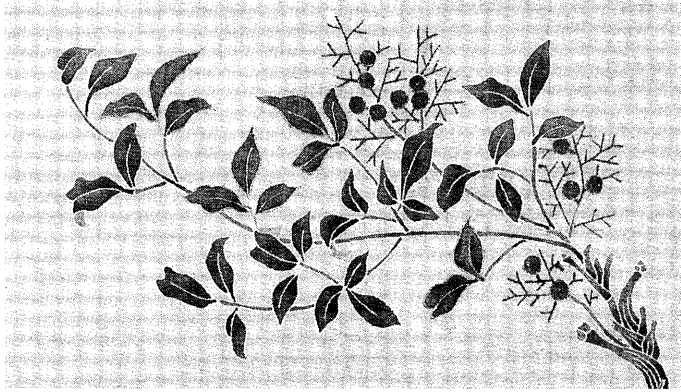
こぎつねさんの わすれもの
わたしの なまえは ほおずきちょうちん

ずいぶん励まされ鍛えられた。

十二か月の花暦と十二までの数を花で楽しもうとしたのだが、ことごと花が結び付かない。母は根っからの花好きで、体全体で花を分かっていた。いなかで自然と共に育ってきたからだ。私は目先と頭で花をとらえる。二月のふきのとうに、母は背景に芽立ちを描いた。土手で春のひざしを溜めて、芽立ちを準備するのを描きたいといった。それを受けてやつと私は「ひだまりにふたつ／ふきのとうふたつ」と書けた。野の草をこよなく慈しんだ人の四月は、かたくりのイメージだった。だからかたくりに踊ってもらった。「くるんくるん／かたくり　くるん／くるんくるん／あなたも　くるん」。六月はくちなし。取り木をして二十年もかけてふやした花だった。「はなは　くちなし／あなたは　どなた／はなは　ろくりん／あなたはいくつ」。九月の彼岸花はスケッチブック



くるんくるん　かたくり　くるん
くるんくるん　あなた　もくるん



ひよどりさん なんてんのみ いくつ
おしょうがつの ごちそう あといくつ

にはなかった。お墓花とか毒草とかで嫌われていたが、二人とも好きな花だった。こびとにとって
は燃えるジャングル。そうイメージした。私の希望する青と赤は沖繩の紅型で良く使われる色で、
母の染料のストックにはない色だった。たった一枚のために、一グラムもいらぬ色のために、私
に黙って染料屋に足を運んだ。十二月は、正月花として活けたい南天。ひよどりが丸坊主に食べて
しまうので、毎年袋をかけていた。「ひよどりさん／なんてんのみ いくつ／おしょうがつの ごち
そう／あと いくつ」。

この染絵の「ぬくもり」は、確かだったよう
だ。子守唄がわりにしていると病気のお見舞い
にして喜ばれたという声が寄せられた。幸い染色
による絵本が珍しかったのか、書評にもいくつか
取り上げられ、シリーズ絵本に続けていきたい夢
が持てた。

『かぜのこ』『あいうえおつきさま』

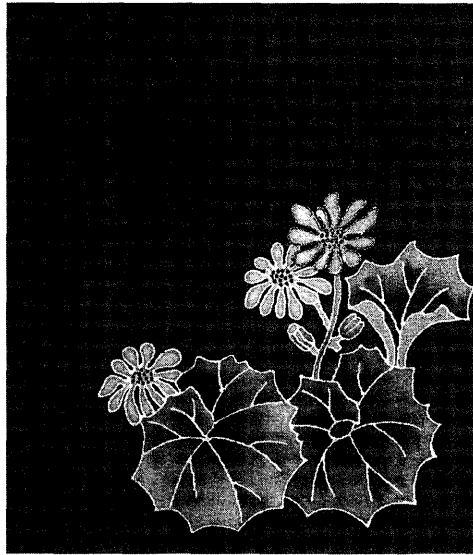
『いろとりどり』（いずれもかど創房）

と、古来から日本人の美意識の対象とされてきた花鳥風月を題材に、数年おきに出した。

「絵本の樹美術館」や「軽井沢絵本の森美術館」はじめいくつかの場所で原画が展示されたが、ある書評子ではないが「趣味的絵本」のようで、若い読者より高年齢の方のほうが反応がよかった。詩とすることばも染色も、日本の美として幼い子どもに伝えたい

と思ったが、橋渡しの大人の力がかなり必要な絵本となった。

創作絵本には、それを詩（文学）と絵画（美術）の融合という一つの芸術作品としてみると、自己表現のひとつに絵本という媒体を選んだ



かぜ なおりますように
あした まんかい つわぶきのはな

と感じるもの、自分の価値観を他者（主として子ども）に明確に伝えようとしているもの、自分の中に深くとどまり昇華されるのを待っている「子ども」を、絵本として形象化しているようなもの、あえて分けてみると、この三つがあるよ

うだ。そして、この三つが一つの絵本に集中しているものは、絵本力“が充実している。したがって、文章と絵画をひとりの人間が創作するほうが、より善いものになるように思える。

例えば、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビット』。一〇〇年を越える年月を経て、世界中で多くの子どもたちの支持をえている。その“絵本力“を生んだエネルギーを、彼女は後日ナショナル・トラスト運動へ向け、以後絵本を創作しなくなった。先の三つから考えると、自己表現の場が変わり、メッセージを向ける子どもたちから心が移り、自然と対話していた孤独な子どもころは、今度は自然を守るために文明にぶつけられたと考えられはしまいか。

二十世紀前半に子どもたちに届いた『ペレのあたらしいふく』『一〇〇まんびきのね』『ぞうのババル』『おかあさんだいすき』『いたずらきん

しゃちゅうちゅう』『ちいさいおうち』『かもさんおとおり』『もりのなか』など絵本力のある作品は、いずれも絵と文が同じ人間から生まれている。

『だるまちゃんどてんぐちゃん』の加古里子も、読み聞かせをしていて総合的な“絵本力“を感じる作品を多く創作している。

これは林明子あれは五味太郎の絵、これはスズキコージ、ブルーナ、レイというように絵画の自己表現が卓越しているのは重要であるが、その他の二つのいずれかが秀逸であることも、時空を越えて残っていくには必要だ。レオ・レオニは自立や自己肯定というメッセージが強く前面に出ているし、長新太には、子どもころのもつ生命力の充溢を感じる。新宮晋の作品には、絵本を形とした、宇宙を見据える自己表現が『いちご』から『小さな池』へと一貫して流れている。ガブリエ

ル・バンサンの画文一致のどの作品からも押し付けがましさのない凜とした人生観を感じる。モリス・センダック、マーシャ・ブラウンの絵本力も時空を越えていくだろう。

絵と文を一人の人間が創作したほうが、絵本力があるといったが、マーガレット・ワイズ・ブラウンやシャロット・ゾロトウ、ミヒヤエル・エンデなどが文章を担当し、絵は別な画家が担当して成功している例はもちろんある。しかし、成功例は決して多くはないのではなからうか。たいていは、文が先にできているから、画家がどのように文章を解釈し絵を描くか。また読者対象をめぐっても意見を一致させる、あるいは妥協点を見いだしていくのは並大抵なことではないと思う。それは、そのまま絵本力の薄まりを意味するからだ。『ぐりとぐら』が姉妹共作と聞くとなるほどと納得したり、『あさえとちいさいいも

うと』『はじめてのおつかい』の筒井頼子・林明子のコンビの作品や、『にぐるまをひいて』など文以上に絵の印象が深いクーニーや、挿画家としてのセンダックに凄いと感心するのは、あるいは絵本を作る大変さと楽しさとを少しは知っているからかもしれない。

(洗足学園短期大学・テリー大学)

☆本文中の四枚の絵は、絵はがき「はなともだち」(絵本からユニフェムよこはまが製作)から、詩は絵本「はなともだち」(かど創房)から転載いたしました。



引き出し

佐藤 寛子

こども達との日々の生活の中で、自分の幼い頃の情景を思い出すことがよくある。眼の前にいるこども達と関わり、つながりを深めていくには、まず自分の中のこどもと向き合うことになるのかもしれない。

和室の奥に背の高い箆笥が置いてある。上の段の引き戸を開けて中にある小さな引き出しから、母が小さな桐の箱を出す。大事に両手で持つてきて、そつとふたを開け、幼い私に見せてくれたものは、ひからびて小さく縮んだへその緒だった。初めて見たときのあの何とも言えない不思議な感

覚と、ほっとして心が温かくなった感触。それが忘れられずに少し背が伸びてからは、母に内緒で自分でこっそりあの小さな引き出しを開けてみたこともあった。母はどういう思いで私にへその緒を見せたのかは分からないが、弟がよく動くようになって母が大変であったり、幼稚園に初めて行くことになったりと、あの時の私は家でも外でもなんとなく所在なかった。へその緒は母と私をつなぐ証であったし、それが筆筒の小さな引き出しに大切にしまわれているということが、あの時の私をしつかりと支え、今の私がここにいるのだと思う。

何年もたつてこの情景を私は忘れてしまった。忘れたというより、私の心の引き出しに大切にしまったままにしておいたという方が正しいのかもしれない。だいぶ時間の過ぎた今になって、心の中のあの引き出しを開けることを思い出させてく

れたのは、紛れもなく日々泣いたり笑ったりとおいそがしのこども達であった。

靴

昨年の四月のことである。年中組のこども達にとっては自分の身の周りの環境が大きく変化し、戸惑いの多い時であった。そして、その戸惑いは、進級したこども達の方が新しく入園して来たこども達より大きかったような気がする。保育室が変わり、クラスの人数が増えた。その上、担任もかわった。

こども達の降園後、しまい忘れた作品をひとりひとりの引き出しに入れようと、M子の引き出しに手を掛けたが、うまく開かない。どうやら物が入りすぎていて、中でひっかかってしまったらしい。新学期が始まって間もない頃であったし、M

子が保育中に何か作っていたような様子はなかった。何がこんなに入っているのかと不思議に思った。上の段の引き出しをはずし、ひっかかっていたものを取り出して驚いた。それは厚紙で作ったかわいらしい靴だった。他にもいろいろ作ったものが、ビニール袋にごっそり入っていた。どれにも丁寧にひらがなで名前が書かれてあった。私には、すぐにそれらがM子が年少組の時に担任のT先生との間で作ったものであることがわかった。私は、何だか見てはいけなかったような気がして、少し整理をして靴を入れ、そっと引き出しを閉めた。

翌日、M子は変わらずに登園し、いつものように仲良しの三人と庭や廊下でままごとをしていた。あの引き出しから作ったものを取り出して、それを使って遊ぶようなことはその後も一度もなかった。

一学期も終わりに近づいた頃、大きなカラービニール袋でドレスを作るのが流行った。M子もみんなと一緒に作り、一日身につけて遊んでいたが、引き出しにしまう段になって、私を呼んだ。「せんせい、いっぱいに入らなくなっちゃった」

私はM子と一緒に、少しずつ中の物を寄せてスペースをつくり、小さくたたんだドレスをそこに入れようとしたのだが、なかなかうまく入れない。すると、M子はあの靴を取り出して言った。

「これ、おうちに持って帰ろうかな」

その後いつの間にか、あのビニールに入った思



い出の品々は、次々と新しく作った物へと姿を変えていき、二学期になってからは、幼稚園に持つてくることはなかった。幼稚園に置いておく必要がなくなったのだろうと思う。

こども達は環境の変化を前向きに受けとめ、何とかそこに自分の場所をつくろうとする。新しい保育室の自分の引き出しに、年少組の時に作ったものをたくさん詰め込むことで、過ごしてきた時間と今をつなごうとしたのかもしれない。

年輪

年長組になると、小さな組のお世話をしたり、幼稚園全体の生活をみんなで創っていくような活動が自然と多くなる。環境の変化に敏感で、年中組のときは変化の一つ一つに戸惑い、何かというと私にぶつかってきたY夫が、さらにランクアツ

プした幼稚園の生活を受け入れられるか心配したが、張り切って登園してくる様子に彼の成長を思い、嬉しくなった。

ある日、新しい自由画帳をこども達の引き出しに入れていたところ、Y夫の引き出しからごろんと丸太が出てきた。年長組の砂場で使えるようにと、隣の組のI先生と水道管や竹筒や板などを棚に用意したのだが、その中に小振りの丸太があった。Y夫はそれを見つけてきて、こっそり自分の引き出しにしまったのだ。

みんなで使うものなので、あった場所に戻すように言う方が良いとは思ったのだが、なぜかそう言うてしまうことが憚られた。一つくらいここにあってでも差し支えないだろう。それよりもY夫がここにこっそりしまっていることの方が意味があるような気がした。

何日かして、Y夫が

「せんせい、木のねんりんてね。いちねんいちねん数がふえるつと知ってた？大きくなるんだよ」と嬉しそうに話してきた。

Y夫は、大きくなることを楽しみに、自分の引き出しに丸太をそつと入れておいたのだ。毎日毎日、大きくなっているか引き出しを開けて確かめていたのかもしれない。丸太はもう大きくなることはないのだが、一年一年、一刻一刻着実に大きくなっている自分をどこかで意識しているのだろう。

その後、本で読んだのか、丸太は成長しないとということが分かったようで、引き出しからこっそりもとの場所に戻すY夫の姿を見かけた。

四葉のクローバー

年長組になってから、なんとなくS子が元気が

ないのが気になっていた。年中組の時は他の人に関係なく自分のしたいことを黙々とやり続け満足して帰るといったのが彼女の幼稚園での生活であったのだが、最近「友達がいらない」と言ってきたり、見かけると暗い表情でぼつんと立っていたりする。自分の望む友達と自分の望む遊びがしたいようなのだが、なかなか上手いかならない。母親からも、「最近下の子の育児に追われ、S子にあまりかまってやれていない」という話を聞いていた。

S子をさそって二人で園庭を散歩することにした。園庭の山の上はクローバーが大きく育って、シロツメクサがたくさん咲いていた。S子はシロツメクサを摘んで束にした。私も摘んだのだが、一緒に抜いてしまったクローバーを見て驚いた。四葉だったのだ。「四葉のクローバーを見つけた」としあわせになれる」という話を誰からともなく

聞いて、幼い頃からクローバー畑を見つけるたびに必死で探してきたのに、自分のしあわせのために必死な時は見つからず、こういうときに出会えることを不思議に思いながら、私はS子の前で飛び上がって喜んだ。

S子は呆気にとられて見ていたが、私が四葉のクローバーの話をし、「Sちゃんと一緒だったから見つかったのよ」と言い、「だから私が持っているよりSちゃんが持っていたほうがいい」と言うと、嬉しそうに笑った。S子のエプロンのポケットになくさないように大事にそれをしまった。

翌日、S子の母親に昨日の話をした。エプロンのポケットにしまったことを話すと、母親は驚いて、「洗濯しちやっただかもしれません」と申し訳なさそうに言った。「昨日私がお話をしなかったのだから仕方がないですよ」と言いながらも、生



まれて初めて見つけた四葉のクローバーが洗濯機の中で粉々になることを想像すると少し悲しかった。ところが、母親と私の話を聞いていたのか、

S子が

「クローバーだったら、ちゃんとあるよ」

と言って、自分の引き出しをそーっと開けた。私と母親が見守る中、その小さな手に大事に握られてきたものは、紛れもなく昨日二人で見つけたあの四葉のクローバーだった。私と母親とは顔を見合わせた。

「Sちゃん、すごいわね。大事に引き出しにしまっておいたのね」

S子の手のひらの四葉のクローバーは、S子と母親、S子と私、そして私と母親を全部ひとつにつないだ。

こども達と過ごしていると、彼らが何をどこまでわかっているのか、何だかわからなくなることもある。おとなが伝えないと形にできないことをたくさん抱えながらも、もつと深いところでおとなが思うよりずっと丁寧にものごとを見たり感じたりしているように思えるからだ。そして彼らはそれを驚くほど具体的に表現してくるのだ。

保育室のひとつひとつの引き出しは、こども達ひとりひとりの幼稚園での場所なのである。ときどき引き出しの中から、ビニール袋に入って乾燥した昆虫が出てきたり、ドライフラワーになっちゃった花束が出てきたり、私が探していたマジックのふたが出てきたりして、入れた本人も驚

いていることがあるが、その時その時の思いの詰まったものを大事に引き出しにしまうことで、
「昨日と今日、今日と明日という時間」や「友達、親、先生との関係」へ「過去・現在・未来の自分」をしっかりとつなぐようとしている。

こども達との生活の中で、私が時折自分の心の引き出しを開けてみたくなるのは、私自身もまた、今の自分がここにあることを確かめてみたくなるからである。そして、おとなになる以前の幼い頃の感覚の方が、今を真剣に生きる彼らとまっすぐ出会えるからである。出会うことを出発にして一緒に過ごしながら、いつかこども達が、ここで過ごしたまるごとの時間や思いを、ごっそり心の引き出しにしまつて巣立つ日がくることを私は願っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編 集 後 記

明けましておめでとうござい
ます。今年もどうぞよろしく願
い致します。今年、表紙絵を
佐々木麻子先生に、カットを
彌永たたえ先生にお願い致
しました。一年間、どうぞ
よろしく願います。

*

阪神大震災から七年がたちま
した。本誌では、その直後に「震
災後の子どもたち」の連載を
始めました。当時、毎日の生
活に窮する現地から書いて下
さる方を探すというこ
とは至難の技でした。その中
で色々な方との出会いもあり
ました。森末哲朗さんもその
一人です。震災後一年にも
及んだ公園でのテント暮ら

し、新しい建物への移転に伴う生活
の変化など、子どもたちの様子を
何度か伝えていただきました。

その「どんぐりクラブ」の様子が
『放課後泥棒—子どもは群れて育つ
んや』（雲母書房）という本にま
められました。改めて当時の様子を
読んでみると連載を始めた頃の私
の気持ちがい出されず。

「材木調達係」として、倒れた家
屋の材木を集めてまわり、それを不
安定なりヤカーに満載して運ぶ、
それは小学生には過ぎた仕事です。
それでもそれがみんなに喜ばれる
お湯を沸かす燃料になる、人の役
に立つている、と実感できる小
学生がそこにいます。

大人に必要とされて持てる以上
の力を発揮している子どもの姿に
胸が熱くなりました。

(A)

幼 児 の 教 育

第一〇一卷 第一号

(二〇〇二年一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十四年一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-12-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三-153-9516-13 (営業)

〒〇三-153-9516-04 (編集)

振替 〇〇一九〇-119640

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレイ

ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

好評発売中

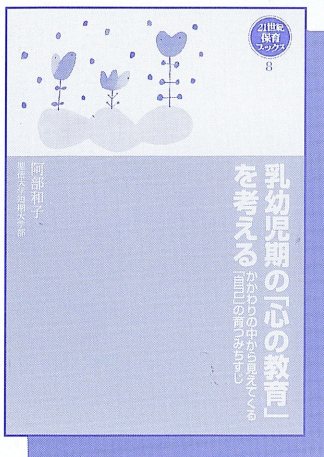
編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女靈峰（淑徳大学教授）

21世紀保育ブックス⑧

乳幼児期の「心の教育」を考える

かかわりの中から見えてくる「自己」の育つみちすじ

阿部和子（聖徳大学短期大学部）著



子どもの保育・教育に関する理論は、先にそれがあったのではなく、それまでの子どもたちの現実から構築されてきたものです。社会状況がめまぐるしく変化し、大きく子ども理解の枠組みの変換が求められている今、本書では現実の子どもの姿から保育・教育を見直します。さまざまなかかわりの中での具体的な子どもの姿を通して、子どもが生きる主体であることを体得する過程を追いながら、生きるための基本を獲得する時期である乳幼児期の意味を「心の教育」という点から考えていきます。

B6判・208頁・定価：本体1,200円＋税

〈本書の内容〉

- 第1部 子どもの日常
- 第2部 子ども－大人関係の中での自己の育ち
- 第3部 子ども－子ども関係の中での自己の育ち
- 第4部 まとめ－自己の育つみちすじ

- | | | |
|-----|--------------------|--------------|
| 既刊本 | ① 新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| | ② 新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真実 共著 |
| | ③ カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| | ④ 子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| | ⑤ 知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| | ⑥ 保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| | ⑦ 地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレイベル館

20世紀は『児童の世紀』だったのか？ エレン・ケイの
100年前の名著を現代保育に活かす道を明らかにする

最新刊

エレン・ケイ 保育への夢

『児童の世紀』へのお誘い

『児童の世紀』とは、エレン・ケイが新しい世紀のスタートを目の前にして、これからの時代こそ子どもたちにとって幸せな世の中にならなければ、という意気込みで執筆したことがよくわかる、見事なタイトルです。その願いにもかかわらず、20世紀は必ずしも子どもたちの世紀にはなりませんでした。

しかし、『児童の世紀』には、現代の保育や子育てへの素晴らしい示唆が、随所に散りばめられています。前著『倉橋惣三 保育へのロマン』に引き続き、荒井冽先生が今回はエレン・ケイの著作に取り組み、彼女の優れた思想・哲学を分かりやすく解説します。

激動の21世紀初頭に贈る、本当の意味での保育改革の道を明らかにする話題の本です。



(この本の内容)

- I 100年目に読む『児童の世紀』
わが道をゆく／自由な遊び／子どもと遊べる者／わたしの夢みる学校／いたずら／家庭生活の芸術家／二人の完全な幸福のもとで／根と花の相互関係／子どもの国よ そのままにてあれ／美しい糸を織り込む／自然の美や芸術の美／農家の小屋に点じた理想の光
- II 読書ノート『恋愛と結婚』
性道徳の発達過程／恋愛の進化／恋愛の自由／恋愛の選択／母となる権利／母性からの解放／社会における母性の役割／自由離婚
- 付 エレン・ケイをめぐるって
「青踏」のこと、カール・ラーションのこと

荒井 冽 (白鷗大学女子短期大学部教授) 著

A5判 176頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館